

幼稚園でのムシ捕りににおける幼児の人間関係に関する研究

金 森 由 華

A Study about the Children's Human Relations in the Bugs Catch at the Kindergarten

Yuka KANAMORI

I 問題と目的

幼稚園教育要領（平成30年改訂版）では、引き続き「環境」の内容で、「身近な動植物に親しみを持って接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする」と記されており、身近な生き物とのかかわりや、生命の尊重について記されている。幼児のムシとのかかわりは、身近な生き物への興味関心を育む「環境」領域としてとらえられることが多いなか、筆者の経験知から、幼児はムシ捕り遊びをしながら、協同性や自立心を身に付けていると推測している。

幼稚園では、幼稚園ごとに様々な生き物が飼育されており、特にムシと幼児のかかわりに注目した研究では山下（2008）がある⁽¹⁾。山下は保育者へのアンケート調査から、ムシの飼育が子どもの社会性の発達を促すことを明らかにしている。ムシを飼育する経験の効果として、「仲間関係を育てる」「子どもの表情が生き生きしてくる」「責任感がつく」「自尊感情が高まる」ことを明らかにしている。幼稚園において、ムシを飼育する意義については動物と比較し、保育者の負担が少ないことや、騒音や異臭などの害がないことや、子どものアレルギーがないことなどがあげられている（山下ら2005）⁽²⁾。これらの研究では、ムシの飼育に注目しており、ムシを捕ることに関しては触れられていない。しかし、幼児とムシとのかかわりはムシを発見するところから始まっており、また、ムシの飼育では自分たちが捕まえたものを飼育することができるという点でも、動物飼育とは異なる利点がある。ムシ捕り遊びは、子どもたちが自分たちの持っている情報を伝え合ったり、ムシの所有権をめぐる口論したりなど、様々な人間関係の学びがあるはずである。そこで、本研究では好きな遊びの時間にムシ捕りをしている幼児に注目し、ムシの飼育に至る前のムシ捕りから、人間関係においてどのような学びがあるのかを明らかにする。本研究を通して幼稚園におけるムシ捕り活動の意義を幼児の人間関係に注目して明らかにしていきたい。

II 研究の方法

1 調査期間

調査期間は2017年5月下旬～7月上旬である。期間の設定理由は以下の2点である。1点目は園庭に幼児が捕まえやすいダンゴムシやテントウムシなどのムシが増え、幼児がムシの存在に興味を持ち始める時期であるからである。2点目は新年度になり新しい人間関係に戸惑うものの、ゴールデンウィークを過ぎ、子どもたちの生活が安定してくる時期だからである。

2 内容

X幼稚園で、好きな遊びの時間にムシ捕りをしている幼児を観察した。幼児は、筆者を保育者として認識している状況での参与観察である。ムシ捕りをしている幼児から、幼児同士のかかわりがある12事例を対象とした。表1に示した「人間を理解し関係を調整する力」21項目(佐々木2004)⁽³⁾を「学びの評価言語」(磯部ら2007)⁽⁴⁾とし、ムシ捕りにおいて人間関係のどのような学びがあったのかを分類した。佐々木が示した21項目の「人間を理解し関係を調整する力」は、「曖昧な表現で、それぞれの保育者がかかわったつもりになる状況を打開するた

表1 「人間を理解し関係を調整する力」21項目(佐々木2004)

A	自分の思うようにならないことを経験する
B	必要な時に人に助けを求める
C	他者が「いや」という行為や事柄に関心をもつ
D	自分がされて嫌なことは、そのことを態度や言葉で表現する
E	嫌なことを受け流したり、距離をおいて付き合ったりする
F	自分と異なる行動や意見に対して考えるゆとりを持つ
G	他者の行為や言葉に関心をもつ
H	他者の思い入れや、思い入れのあるものに気付く
I	他者の言い分に真剣に耳を傾けて聴く
J	感情を込めた言葉や理論的な言葉で伝えたり説明したりする
K	他者の行為の意味について想像力を働かせる
L	友達の遊びや活動に入ったり、友達を誘ったり、受け入れたりする
M	遊びの中でやりたいことをしたり、なりたい自分を表現したりする
N	イメージを共有したり、役割分担をしようとする
O	自分の気持ちや行動、他者からの評価などの変化に気付いたり関心を持ったりする
P	自分や他者の良さに気付いたり、それを生かしたりする
Q	自分と違うところをもつ人に憧れる
R	友達や他者に共感したり応援したり、励ましたりする
S	仲間のトラブルに介入したり、関係を調整したりする
T	緊張した場面をユーモアで和ませたり解決したりする
U	問題に対して創造的に解決しようとする

めに作成」されており、小泉ら(2011)⁽⁵⁾は「人間関係を理解し関係を調整する力」21項目を「学びの評価言語」とし縦割り保育で子どもたちが経験していることを明らかにしている。これらのことから、本研究でも、幼稚園において幼児の人間関係を可視化するのに適していると判断し「人間関係を理解し関係を調整する力」21項目を「学びの評価言語」として用いる。

3 協力者

X県にある、学年別クラス編成で一斉保育を行っている、在園児数156名のX幼稚園である。

(1) X幼稚園の概要

昭和59年に開園した私立幼稚園である。自然に恵まれた地域にあり、幼稚園内には幼児が自然と触れ合える空間がある。その中には草むらや草の土手などがあり、ミントやローズマリーなどのハーブ類やツルグミやムラサキシキブなどの実を自由に採集できる。草むらや草の土手には、テントウムシ、カマキリ、カタツムリ、ダンゴムシ、チョウ、バッタ、カナブン、トカゲなどの生物がおり、好きな遊びの時間にムシ捕りをしている幼児が30名ほどいる。

(2) 日課の例

年長児クラス、年少児クラスの日課は、年中児クラスと同じだが時間の配分が異なる。行事などにより、保育内容が変わることがある。

表2 年中児クラス日課の例

時間	早く到着するバスグループ	遅く到着するバスグループ
8:30～	登園	
9:00～	好きな遊び(戸外)	登園
10:00～	朝の会	
10:30～	主な活動(リトミック、制作、体操など)	
12:00～	昼食	
13:00～	好きな遊び(戸外)	
14:00～	帰りの会	
14:30～	降園	好きな遊び(戸外)
15:30～		降園

4 ムシ捕りの環境構成

(1) 飼育ケースの場所と数

幼児がムシ捕りを楽しむことができる環境設定として、職員室に幼児が使用することができる横14cm×縦8cm×高さ12cmの飼育ケースを30個用意してある。飼育ケースは、職員室の園長デスクの隣においてあり、使いたいときに職員室に行き自分の名前を告げて借りる。そのため、幼児は飼育ケースに対し、他の共同の用具より特別感がある。職員は名前と借りた飼育ケースを記録しているため、どの幼児がムシ捕りをしているのかを把握することができる。他の幼児が借りているため、飼育ケースがなくなっている場合は、カップなどの廃材を飼育ケー

スとして代用する。飼育ケースの代用になる廃材は園児が自由に使えるように用意してある。捕虫アミがないため、幼児は飼育ケースのふたを取って、ケースをムシに被せる捕まえ方が広まっている。

(2) 捕まえたムシに関するルール

捕まえたムシに関して以下4点のルールがある。①友達にもらうなどしたが、自分で触れないムシは飼育せず、捕まえた場所に逃がす。②捕まえたムシを自分で飼育しないならば、捕まえた場所に逃がす。③幼稚園で捕ったムシを自宅で飼育する場合は、幼稚園の飼育ケースを持って帰って良いが、自宅の飼育ケースにムシを入れ替え、翌登園日に返却する。④家庭で話し合い、家で飼えない場合は幼稚園の捕まえた場所に逃がす。

5 倫理的配慮

事例に取り上げている幼稚園をXとし、幼児名はすべて数字とアルファベットで表記し、個人が特定されないように配慮した。調査協力幼稚園の職員には、本調査を本研究にのみ使用し、幼児や保育者個人が特定されないことを説明し承諾を得た。

III 結果と事例ごとの考察

1 人間を理解し関係を調整する力21項目を学びの評価言語とした分類

幼児同士のかかわりがあった12の事例について、「人間を理解し関係を調整する力」21項目を「学びの評価言語」へ振り分け、結果を表3に示した。

「A自分の思うようにならないことを経験する」項目に該当する事例が最も多く、6事例あった。「L1友達の遊びや活動に入ったり、友達を誘ったり、受け入れたりする」は次に多く、5事例だった。「F自分と異なる行動や意見に対して考えるゆとりを持つ」「M遊びの中でやりたいことをしたり、なりたい自分を表現したりする」「Nイメージを共有したり、役割分担をしようとする」「T緊張した場面をユーモアで和ませたり解決したりする」の4項目は該当する事例がなかったが、その他18項目は該当する事例があった。

12事例中7事例が異年齢、特に年長児と年中児のかかわりがあり、年少児がムシ捕りをする姿はほとんど見られなかった。「人間関係を理解し調整する力」21項目の「学びの評価言語」とした学年別の分類(表4)では、年長児が該当する項目は15項目あり、年中児が該当した項目は8項目であった。年長児と年中児どちらも該当する項目は「A自分の思うようにならないことを経験する」「L1友達の遊びや活動に入ったり、友達を誘ったり、受け入れたりする」「D自分がされて嫌なことは、そのことを態度や言葉で表現する」「P自分や他者の良さに気付いたり、それを生かしたりする」「S仲間のトラブルに介入したり、関係を調整したりする」の5項目であった。

表3 事例別の人間を理解し関係を調整する力21項目を学びの評価言語とした分類

		X 幼稚園でのムシ捕り 12 の事例											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
「人間関係を理解し調整する力」 21項目	A				○		○	○			○	○	○
	B												○
	C											○	
	D										○	○	
	E				○						○		
	F												
	G	○	○	○								○	
	H						○	○		○			
	I							○					
	J				○		○	○					
	K											○	
	L	○		○		○			○			○	
	M												
	N												
	O			○						○			
	P	○		○									
	Q			○				○	○				○
	R		○										
	S				○								○
	T												
	U						○						○

表4 学年別の人間を理解し関係を調整する力21項目を学びの評価言語とした分類

		X 幼稚園でのムシ捕り 12 の事例学年別	
		年中	年長
「人間関係を理解し調整する力」 21項目	A	○	○
	B		○
	C	○	
	D	○	○
	E		○
	F		
	G		○
	H		○
	I		○
	J		○
	K	○	

L	○	○
M		
N		
O		○
P	○	○
Q		○
R		○
S	○	○
T		
U	○	○

2 事例と考察

(1) 事例1と考察

① 事例1（5月）

年長男児1Aが、飼育ケースを持って何かを探している様子の年中女児1Bと1Cをみて、1Bと1Cの会話からダンゴムシを探していることに気付く。年長男児1Aが年中女児1Bと1Cに「ダンゴムシ、どこにいるか教えてあげようか」と言い、ツツジのところへ2人を連れていく「ダンゴムシ、ここにいるよ」と、1Aがツツジの下を探し始める。「どこどこ」と1Bと1Cもしゃがみ始めダンゴムシを探し始める。すぐにみつき「ほんとだ」「いっぱい捕まえよう」と1Bと1Cは競い合うようにして、ダンゴムシを捕まえ始める。1Aは得意げに「ほんとだったでしょ」と言い、自分はいつも遊んでいる年長男児のグループの遊びに入っていく。

② 考察

日頃、かかわりがなく、偶然そこに居た年長男児1Aが年中女児1Bと1Cにダンゴムシがとれる場所を伝え、実際に連れて行った事例である。年長男児1Aにとっては、ムシを探している様子の女児に対し、自分の知識を伝えるという行為で積極的に他児とかかわっている。1Aはこれまでかかわりがなかった、1Bと1Cのムシを探している様子をみて、気の合う友達のみではなく、様々な他者にかかわっている様子を読み取ることができる。自分の知識を生かして、他者の役に立つ喜びを味わった1Aと、通りがかった1Aからの親切により、自分たちの遊びが広がっていく喜びを感じることができた1Bと1Cの学びを読みとることができる。この事例は「㊤他者の行為や言葉に関心をもつ」「㊦友達遊びや活動に入ったり、友達を誘ったり、受け入れたりする」「㊰自分や他者の良さに気付いたり、それを生かしたりする」の3項目が該当するといえる。

(2) 事例2と考察

① 事例2（5月）

年中男児2Aが捕まえたダンゴムシを、近くにいたムシ捕りをしている年長男児2Bに「見て、捕まえた。」と自信に満ち溢れた表情で報告する。年中男児2Aと年長男児2Bは、日頃の生活の中ではかかわりが無い関係である。見せられた、年長男児2Bも「ほんとだ」と感心してい

る様子である。2A は一緒にいる保育者ではなく、ムシ捕りをしている日頃かかわりが無い年長男児2B に、見せに行った。

② 考察

この日は、晴天が続いたことなどから、園庭にいるダンゴムシが少なくなっていた。ムシ捕りをして、ダンゴムシをなかなか見つけられない状態だった。2A がダンゴムシを捕まえたとき、近くに保育者がいるが、保育者は一緒にムシを捕るというよりは、ムシ捕りをしている幼児を見守っていた。年中男児2A は、保育者よりムシ捕り活動をしている年長児に認められたい、共感してもらいたいという気持ちが表れていることが読み取れる。年長男児2B は、他者の感動に共感する経験をしていることが読み取れる。この事例は「㊤他者の行為や言葉に関心をもつ」「㊤友達や他者に共感したり応援したり、励ましたりする」が該当するといえる。

(3) 事例3と考察

① 事例3（6月）

年長女児3A が、保育者の周りに数人の女児と一緒にいた。保育者から薦のツルをめくるとカタツムリがいたという話を聞き、年長女児3B と一緒に、薦のツルを確認に行く。3A が薦のツルをめくるとカタツムリがいた。年長女児3A ははしゃいで、近くにいる3B に薦のツルをめくるように促す。3B もツルをめくるとカタツムリを見つけ、興奮したように「ほんとだ」とカタツムリを捕りはしゃいでいる。周りにいた他児が、他のムシ捕りをして遊んでいる子のところへ行き「3A ちゃんが、カタツムリみつけたよ」「カタツムリいるよ」「こっちきて」と大きな声で触れ回っている。情報を聞き幼児が集まり始める。集まってきた幼児が実際にツルをめくってみると、カタツムリがいたため、幼児は夢中になってツルをめくりカタツムリを捕まえる。その様子をみて3A は得意げに、カタツムリの見つけ方や捕まえ方を説明する。3A は、保育者がその場をはなれても、いつものように保育者を探す様子はなかった。降園時に母親にも同様に、カタツムリの見つけ方を説明していた。

次の日には、年長女児3A はダンゴムシがたくさんいる場所をみつけ友達に知らせる。年長児が集まってきたため、ダンゴムシがいる場所は、年長児に独占される。年中男児3B が「いれて」と繰り返す言うが、年長児はダンゴムシを捕まえることに夢中で返事をしない。年長女児3A は無言で少しずれて場所を空け、年長男児3B の飼育ケースに捕まえたダンゴムシを数匹入れる。その後、自分の飼育ケースを幼稚園にもってくるようになり、ムシを捕まえて自分のものにするのではなく、ムシを友達に配っている。

② 考察

X幼稚園において、カタツムリはダンゴムシと比較し発見できる個体数が少ないため、ダンゴムシより人気があるムシである。年長女児3A は、幼稚園での生活を楽しんでいるが、好きな遊びの時間には、友達と遊ぶよりも保育者と遊ぶことを好む傾向があった。ムシ捕りにあまり関心がない年長女児3A である。事例では、日頃ムシ捕りをして遊んでいる他の幼児が、晴れの日が続くムシをなかなか見つけられない中で、3A はカタツムリを発見した。そのため、友達から「3A ちゃん＝ムシについて詳しい」という認識を持たれるようになり、3A 自身も自

信が付き、夢中になれることを見つけれられた事例である。同じクラスの女兒から「だいたい男の子がムシすきだけど、3Aちゃんは得意だよ。女の子なら一番だね。」という発言があった。他者から認められることにより、友達の良さに気づき、一緒に活動するようになっていった。次の日の事例では年中児に対し、ダンゴムシがいる場所に入れてあげる、自分が捕まえたダンゴムシをあげる思いやりを読み取ることができる。この事例から、「㉔他者の行為や言葉に関心をもつ」「㉕友達の遊びや活動に入ったり、友達を誘ったり、受け入れたりする」「㉖自分の気持ちや行動、他者からの評価などの変化に気付いたり関心を持ったりする」「㉗自分や他者の良さに気付いたり、それを生かしたりする」「㉘自分と違うところをもつ人に憧れる」の5項目が該当するといえる。

(4) 事例4と考察

① 事例4（6月）

年長男児4Aが、バッタを捕るために飼育ケースの蓋をとり、飼育ケースを裏返してバッタの上にかぶせて捕まえようとするが逃げられる。隣でムシ捕りをしていた年長男児4Bは、4Aが見つけたバッタに、蓋を取った飼育ケースをかぶせると捕まえることができた。4Aは「僕のバッタだよ、最初に見つけたのは僕だから」と、発見したのは自分なので自分のバッタだと主張する。4Bは「僕が捕まえたから僕のだよ」と捕まえた自分に所有権があると主張する。4A「ぼくのだよ、だって僕が最初に見つけたんだもん」4B「捕まえたから僕のだよ」という言葉の繰り返しである。3回ほど繰り返した後で、近くにいた年長男児4Cは「捕まえたほうのものだよ」と入ってくる。発見した4Aが「もう」と言い、あきらめてまた4Aと4Bで他のムシを探し始める。年中男児4Dはムシ捕りを止めて年長児3人のやり取りを近くでみているが、解決されると再びムシ捕りを始めた。

② 考察

年長男児4A、4B、4Cは、好きな遊びの時間に、いつもムシ捕りをしている。年中では同じクラスだった仲間である。4Cは年中2学期ごろまで、友達とかかわることが出来ず、一人で砂場遊びを楽しんでいることが多かった。年中の秋ごろから、ムシ捕りを始めるようになり、年長に進級してからは、ムシ捕りを通して自分の知識を伝達したり、意見を主張したりなど友達と積極的にかかわる様子が見られるようになった。ムシ捕りではムシの所有権をめぐり、自分の思うようにならないことを経験する場面がある。この事例も、4Aと4Bはムシの所有権をめぐり、自分の言い分を論理的に主張していた。4Aは自分の意見を主張するが、4Bと4Cの「捕まえたものの物である」という意見を聞き入れ、4Aがあきらめることにより解決した。

この事例は「㉙思うようにならないことを経験する」「㉚嫌なことを受け流したり、距離をおいて付き合ったりする」「㉛感情を込めた言葉や理論的な言葉で伝えたり説明したりする」「㉜仲間のトラブルに介入したり、関係を調整したりする」の4項目が該当するといえる。

(5) 事例5と考察

① 事例5（6月）

年長男児5Aがアリの行列を見つけ、アリの踏み潰したり、行列の真ん中に石を置いたりし

て観察している。そこに、幼児が「クサムシ」と呼んでいるゴミムシの一種である5mmほどの黒い虫が偶然とおりがかり、5Aはその黒い虫をつぶし、アリの行列に置いてみた。すると、すぐにアリが黒い虫を巣の中に引き込んだ。5Aは興奮気味に「クサムシ」がアリに連れ去られたことを保育者に伝える。保育者が観察に加わり、保育者と楽しそうにしている5Aの様子に気づき、年長男児2人か集まってくる。5Aは保育者に説明したように、自分の発見を2人に話している。2人は同じように「クサムシ」を指や石でつぶし、アリの行列に置いて、つぶした「クサムシ」がアリの巣に引き込まれるのを楽しんでいる。その後、アリが「クサムシ」を巣に入れる様子に満足した5Aは、乾燥したミミズを置くが、アリは持っていけない。我慢できなくなった5Aは、ミミズをアリの巣に差し込む。その場にいる全員で盛り上がり笑っている。次の日、同じように5Aと年長男児2人がアリの巣を見ていると、年中女児2人も興味をもって集まってくる。この日は5Aではなく、昨日からいた年長児5Bが年中女児2人にアリの様子やアリが巣に入れる「クサムシ」について熱心に話している。年中女児2人も一緒になって「クサムシ」を探し、つぶしてアリの巣の近くに置き、巣の中に運んでいくのを観察している。

② 考察

この事例は、アリの行列の観察を通して異年齢の仲間が増えていった事例である。5Aは日頃、年長男児の友達と一緒にムシ捕りを楽しんでいる。この日は、他児が飼育ケースを使っていたため、飼育ケースを使うことができなかった。カップや牛乳パックを使うことを保育者に提案されていたが、カップや牛乳パックは使わず、何も持たずにムシ捕りをしているグループに参加していた。アリの行列に気付く前は、ダンゴムシがいる場所に座り込み、ダンゴムシを捕まえる友達の様子を見ていた。アリの行列に気付くと、仲間から離れアリの行列を見ていたが、自分から仲間を誘うことはなかった。友達が自分の活動に入ってくるととても嬉しそうにかかわっていた。

この事例は、5Aが友達を誘うことはなかったが、自分の活動に友達を受け入れていること、他の4人は友達の遊びや活動には入っていることから「①友達の遊びや活動に入ったり、友達を誘ったり受け入れたりする」が最も近い項目であるといえる。

(6) 事例6と考察

① 事例6（6月）

年長男児6Aと6Bが、園庭内の石垣の隙間を除いてムシを探している。6Aが「カナヘビがいた」と大きな声で、近にいるムシ捕りをしていた仲間に言うと、6Bが不満げな表情で「僕が先に見つけてたし」と言いだした。6Aは「何にも言っていないから僕が見つけたんだよ」と、6Aと6Bでもめ始める。「僕だし」「僕だし」と言い合いをはじめ、「カナヘビがいた」と声をあげた6Aのほうが6Bに「じゃあどっちも最初に見つけたってことにしない」と提案し6Bも「いいよ」と言い、2人で一緒に他のムシを探し始める。

② 考察

園庭内にある石垣の隙間は、晴れが続いていてもムシがいるため、年長には人気のムシ捕り

スポットである。カナヘビは子どもたちに人気がある生き物であり、ダンゴムシやバッタより人気がある。そのため、カナヘビを捕まえると憧れの対象になり、見つけただけでも、友達の興味関心を引くことができる。6Aと6Bはいつもムシ捕りをしている年長男児である。2人でもめていた時に隣に保育者がいたが、助けを求めることはなく、自分たちで解決していた。「僕だし」の繰り返しの間に、2人以外も石垣の隙間をみて楽しそうにしている友達が見えていた。そのため、早く解決してムシを探したいという気持ちがあったことが考えられる。

この事例は「㉔思うようにならないことを経験する」「㉕他者の思い入れや、思い入れのあるものに気付く」「㉖感情を込めた言葉や理論的な言葉で伝えたり説明したりする」「㉗問題に対して創造的に解決しようとする」の4項目が該当するといえる。

(7) 事例7と考察

① 事例7（6月）

年少児、年中児、年長児が合わせて11名、実習生と一緒にムシ捕りをして遊んでいた。幼児は実習生が素早くいろいろなムシを捕まえるのを感じながら見ている。実習生がカナヘビを捕まえ「欲しい人いますか」と全員に問いかけると、年長児から「ほしい」「ちょうだい」と声が上がり、つられて年中、年少児も「欲しい」と実習生に訴え始める。実習生が「ちゃんと飼えるお友達にあげる」というと全員が「ちゃんと飼える」と実習生に告げる。実習生からの提案で実習生にじゃんけんで勝った幼児にカナヘビを渡すことになり、7Aがじゃんけんに勝ち、カナヘビの所有権を得る。一緒にいた年長男児7Bは「7Aちゃん本当にお世話できるの?」と言い不満そうである。7Aは「できるもん」と一言返し、保育者に「カナヘビもらった」「じゃんけんに勝ったからだよ」と得意げに話している。「ちゃんとお世話する」と、自宅に連れ帰ったが、翌日また連れてくる。保育者に「カナヘビ逃がしてきた、お母さんが飼っちゃダメって言ったから」と告げると、昨日じゃんけんで負け、カナヘビの所有権を得ることができなかった年長男児7Bから「飼えないなら何でじゃんけんしたの」と、強く非難され7Aは泣き出してしまった。

② 考察

年長女児7Aは、友達と遊ぶよりも保育者と遊ぶことを好む傾向にある。屋外での好きな遊びの時間に担任を独占できないと職員室にいる職員に話しかけおしゃべりを楽しんだりする。この日は、男性実習生とかかわりたいという気持ちから、実習生の後を付いて実習生が何をするのか見ている様子だった。一方で、年長男児7Bは日頃からムシ捕りをして遊ぶことがほとんどである。7Bは7Aとは異なり、実習生と一緒に遊ぶために実習生の周りにいたのではない。実習生が自分たちには捕まえられないムシを、捕ってくれるのではないかと期待して、実習生のそばにいた。

カナヘビはX幼稚園で人気がある生き物である。7Aはじゃんけんに勝って、他児からも人気がある男性実習生にカナヘビをもらう特別感を味わい、世話をすると意気込んで帰るが、自分の意思に反して飼えない状況にあることを、他児からせめられる困難を味わった。一方で、7Bは世話ができる自分はカナヘビの所有権を得ることができなかったのに、世話がで

きない7Aが所有権を得て、カナヘビを逃がしたことに納得がいかなかった。

この事例は「㊦思うようにならないことを経験する」「㊦他者の思い入れや、思い入れのあるものに気付く」「㊦他者の言い分に真剣に耳を傾けて聴く」「㊦感情を込めた言葉や理論的な言葉で伝えたり説明したりする」「㊦自分と違うところをもつ人に憧れる」の5項目が該当するといえる。

(8) 事例8と考察

① 事例8（6月）

事例4の年中男児4Dが、ムシがいる石垣の隙間を一人でじっと見てムシを探している。特定のムシを探しているのではなく、「なにかいないか」見ているようである。保育者に「なにかいた？」と尋ねられると、「昨日、白バッチさんが見つけたから見てるの」と答えていた。年長児が石垣の隙間からダンゴムシやカナヘビを捕まえるのをイメージしながら石垣の隙間を見ているようである。その後、4Dは、ムシ捕りをして遊んでいる年長男児グループの様子を少し離れて見ていたが、カップを持っていき、ダンゴムシをたくさん捕まえている年長男児8Aに、「ひとつちょうだい」と交渉する。「いいよ」と年長男児8Aが快く応じる。

年長児8Aは「先生、この子にダンゴムシあげた」と保育者に報告し、保育者は「8A君優しいね。この子は4D君っていうお名前だよ」と教えられていた。次の日8Aは「4D君、ダンゴムシついてるよ」名前で呼び、自分の捕まえたバツタを4Dに見せていた。

② 考察

年長児8Aと年中児4Dは、日頃かかわりがない関係である。年中児4Dは家庭では5歳年が離れた兄がおり、小学生の遊びを見ていることが多い。幼稚園でも好きな遊びの時間には、同年齢の友達と一緒に遊ぶことより、年長男児グループの周りにはいる姿を見かける。周りにはいるが自分から活動に入っていくことはなく、ムシ捕りの様子をただ眺めているだけであった。年長児の遊びに憧れはあるものの、ただ見ていることを楽しんでいる様子だった。事例では、4Dが年長児の活動に自分から入ろうとする姿をとらえることができる。年長児8Aは年少、年中と親しい友達ができず、保育者に仲立ちしてもらってもすぐに、仲間から外れてしまい、外れてしまうことで「お友達とあそびたい」と泣き出してしまったり、帰宅後に母親に幼稚園で友達と遊べないことを相談したりする姿があった。年長に入り、ムシ捕りを媒介して友達とかかわれるようになり、5月にはムシ捕り以外にでも友達とかかわれるようになっていた。人見知りする年長男児8Aであるが、かかわりがない年中児4Dに対して戸惑うことなくかかわっていたことが読み取れる。

この事例は「㊦友達遊びや活動に入ったり、友達を誘ったり、受け入れたりする」「㊦自分と違うところをもつ人に憧れる」の2項目が該当するといえる。

(9) 事例9と考察

① 事例9（6月）

晴れの日が続き、ムシを発見しにくくなっている。そのため、ダンゴムシやバツタ、カタツムリなどを見つけると、周りにはいるムシ捕りをしている他児から「ちょうだい」と頼まれるこ

とがある。年中男児9Aは、ムシを飼育するためではなく、誰かに渡すためにムシを捕り、ダンゴムシを捕まえると「だれかダンゴムシ欲しい人」とまわりにいる年中男児に声を掛ける。「はい」「はい」と手を挙げて他児が集まってくると、「だれにしようかな天のかみさまのいうとおり」と指をさして自分が捕まえたムシを渡す相手を決めている。

② 考察

年中児9Aは飼育ケースを借りることなく、ムシ捕りをしている。捕まえるとすぐに、ムシを渡す友達を探し始める。自分が捕まえたムシを渡すことで、活動の中心になることを楽しんでいる様子を読み取ることができる。この事例から、9Aは他者の興味関心を理解し、物をあげる行為を経験している。幼稚園では個人の所有物を、友達にあげることが難しい。事例からは、ムシ捕りを媒介として、相手が何を欲しがっているのかに気付き、それをあげるやり取りを経験していることが読み取れる。

この事例は「㊦他者の思い入れや、思い入れのあるものに気付く」「㊧自分の気持ちや行動、他者からの評価などの変化に気付いたり関心を持ったりする」の2項目が該当するといえる。

100 事例10と考察

① 事例10（6月）

バッタを見つけた年長児10Aが「あっバッタ」と言い、捕まえようとするが逃げてしまう。隣にいた年長男児10Bが捕まえて自分が持っていた飼育ケースに入れる。10Aは激しく怒り「10Aのだよ」と抗議する。10Aが殴りかかりそうになり、10Bは飼育ケースにバッタを入れたまま走って逃げる。10Aは必死で追いかけるが、10Bの方が速く走れるため逃げられてしまう。10Aの姿がみえなくなると、すぐに自分で他のムシを探し始めた。10Aも10Bとは別の場所でムシを探し始める。

② 考察

いつも一緒にムシ捕りをしている、年長男児のグループにいる2人である。初めに見つけた者に所有権があるのか、実際に捕まえた者のほうに所有権があるのかが、はっきりしていないため、このような場合、子ども同士で所有権をめぐる争いになる。同じムシの所有権をめぐる争いだが、事例4とは異なりこの事例では、自分たちで解決しようとせず、殴りかかろうとするものの逃げられてしまう。10Aは納得がいかないが、保育者に助けを求めるのではなく、あきらめて、再びムシを探し始めた。10Aは、日頃は嫌なことがあっても殴りかかるようなことはなく、言葉で主張するタイプである。この日は晴れの日が続きバッタを見つけることが難しく、バッタが貴重だったため、ようやく見つけたバッタをとられてしまったと感じ、激しく怒ったと考えられる。10Aに対し10Bは、10Aの激しく怒る様子と殴りかかれそうになり慌てて逃げる。10Aは10Bが見えなくなり、見つけたバッタをとられた怒りを自分なりに抑え、気持ちを切り替えている様子を読み取ることができる。

この事例は「㊨思うようにならないことを経験する」「㊩自分がされて嫌なことは、そのことを態度や言葉で説明する」「㊪嫌なことを受け流したり、距離をおいて付き合ったりする」に該当するといえる。

(11) 事例11と考察

① 事例11（7月）

暑い日が続き、ムシを見つけるのが難しい日が続いていた。年中男児11Aが「ここにダンゴムシいる」と、見つけたことにはしゃぐ。近くにいた他の年中児3人と一緒に、その場所にスコップで穴を掘り探している。「虫かごに土いれてあげて」「もっと、ほって」と4人で会話を楽しみながらダンゴムシを探していた。次の日になると、11Aが一人で同じようにダンゴムシを探すため土を掘っている。11Aがダンゴムシを見つけ「ダンゴムシみつけた」「11B君ダンゴムシ見つけたよ、こっちきて」と離れたところにいた11Bを数回よぶ。11Bが呼びかけに気づき「ほしい」と行くが、「ダメ」とすかさず断られる。11Bは「自分で探す」と、その場所を探し始める。しかし、11Aは「ここは僕の場所だからダメ」と追い出そうとする。11Bの不満そうな表情に、近くにいた保育者が11Aに「11Bくんのこと、どうしてよんだの？」とたずねられ、11Aは「見せてあげただけ」と説明するが、保育者に「11B君は、よばれたから一緒にダンゴムシ捕ろうとしたんだよ、入れてあげて」とたしなめられ、11Aは無言でその場所を、スコップで掘り始める。11Bも無言でダンゴムシがいたところを掘り始める。しばらくすると、会話がはじまり、二人の世界を楽しんでいた。

② 考察

11Aと11Bはいつも一緒に遊んでいる気の合う友達同士である。11Aはダンゴムシを見つけ、友達と喜びを共有したい気持ちと、貴重なダンゴムシを独り占めしたい気持ちからの行動であるが、11Bの納得がいけない様子に戸惑っていた。一方で、11Bはダンゴムシと一緒に捕るために呼ばれたと思ひ喜ぶが、自分の思いとは違い、11Aに拒否され納得がいけない気持ちを味わった。保育者が自分の気持ちを代弁することにより11Bは納得した様子だったが、11Aは保育者に11Bの気持ちを説明されても、最初は素直に受け入れられなかった。一緒にダンゴムシを探し始め、一緒に活動する楽しさを味わううちに11Bを受け入れるようになった。

この事例は「④思うようにならないことを経験する」「⑤他者が嫌という行為や事柄に関心をもつ」「⑥自分がされて嫌なことは、そのことを態度や言葉で説明する」「⑦他者の行為や言葉に関心をもつ」「⑧友達の遊びや活動に入ったり、友達を誘ったり、受け入れたりする」「⑨他者の行為の意味について想像力を働かせる」に該当するといえる。

(12) 事例12と考察

① 事例12（7月）

コキア（植物名）の下を年長男児12Aが掘ると偶然カナブンの幼虫を発見する。数日前にかがくのと『ハナムグリ』⁽⁶⁾を学級で読んでいたことも影響し、まわりにいた幼児は、「ハナムグリだ」と大喜びである。すぐに年長男児10人が集まってきて、幼児が夢中になってコキアの下を掘り始める。一人につき5～6匹ほどは見つけることができた。見つけたカナブンの幼虫に対し所有権をめぐる争いになっても、年長男児のグループは「じゃんけんで決めよう」と、すぐに自分たちでじゃんけんをして解決していた。その後、好きな遊びの時間になるとカナブンの幼虫を捕るために年長児が集まり、その外側を年中児が囲むようにして、カナブンの

幼虫探しを楽しんでいた。一週間ほどすると、年中児も中心で、カナブンの幼虫探しを楽しむようになってきた。年長男児12Aと年中男児12Bが見つけた幼虫の所有権をめぐり口論になる「ボクのだよ」と年中男児12Bは主張するが年長男児12Aも自分のものであることを主張し、「じゃんけんしよ」と提案するが、年中児12Bは納得がいかず「僕のもの」と主張する。他の年中児も加わり「みんなのものだよ」と意見をいうが、結局、年中男児12Bは納得がいかないうちに、年長男児12Aの意見通りじゃんけんで決めることになった。

事例3の年長女児3Aに「3Aちゃん、とって」とカナブンの幼虫を捕るよう、年長女児12Cが頼んでいる。快く幼虫をとって渡している。他児が「幼虫いた」というと12Cから「3Aちゃん」と呼びかけられ、3Aは他児と競い合って幼虫を捕り、自分のものにしているのではなく12Cに渡していた。

② 考察

この事例の一週間前に縦割り保育を行い、異年齢での生活を経験している。年長児と年中児が意見をぶつけ合うほどのケンカになったことはなく、これまでの遊びのなかでは、異年齢児に対して不満がある場合は「年長さんのあのこが……」「年少さんが〇〇してる」など、保育者に不満をうたえることが多かった。この事例では、異年齢でも保育者を通して意見を言うのではなく、当事者に意見を言っている。年中と年長とが争っていたため、年中児は自分たちと同じ学年である年中児12Bの味方をし、問題を解決しようとしていた。

年長女児3Aと12Cのやり取りで、12Cは自分で幼虫をつかめないものの、みんなが競っているものなので自分も所有したいという気持ちがある。事例3以降、ムシ捕りに夢中になっている3Aに頼むことにより、幼虫を自分のものにしている。

この事例は、年中児12Bにとっては「④思うようにならないことを経験する」が該当し、年長児12Cは「⑤必要な時に人に助けを求める」「⑥自分と違うところをもつ人に憧れる」に該当する。12Aと12Bのやり取りを解決しようとしていた年中児は「⑤仲間のトラブルに介入したり、関係を調整したりする」「⑦問題に対して創造的に解決しようとする」の項目が該当するといえる。

IV 総合考察と今後の課題

ムシ捕りをしている幼児に注目し、人間関係にどのような学びがあるかを明らかにするために、ムシ捕りの12事例を、「人間関係を理解し調整する力」21項目の「学びの評価言語」として分類した。その結果、以下のことが明らかになった。

事例別と学年別に分類した結果、「④思うようにならないことを経験する」「⑥自分がされて嫌なことは、そのことを態度や言葉で説明する」「⑤仲間のトラブルに介入したり、関係を調整したりする」など「嫌なこと」を経験したり解決したりすることに関する項目が多く該当している。その要因として、ムシ捕りは複雑なルールや明確なルールがなく、単純にムシを捕まえる遊びであることが考えられる。ルールを介在しない遊びだからこそ、ムシの所有権を争う

などのトラブルになりやすく、幼児は「嫌なこと」に対し、どのように他者と調整するのかの学びがあることが示された。

事例別の分類結果から、ムシ捕りは、他者を誘ったり受け入れたりする学びがあることが示された。ムシ捕りは、複雑なルールや明確なルールがないため、他者を活動に受け入れやすい状況にある。気の合う仲間同士で遊んでいても、ムシの出現状況によって、仲間と異なる行動をするなど、緩やかな仲間集団を結成して活動している。幼児にとって、誰を活動に入れても、自分たちの遊びの雰囲気壊されることがなく、夢中になって遊べるからであると推測できる。

ムシ捕りにおいて「嫌なこと」を経験する学びと、他者を活動に受け入れる学びがあることの要因として、複雑なルールや明確なルールがないことをあげた。所有権をめぐる争いでは、じゃんけんで決める、見つけた者が所有権を得るなど、明確なルールを決めてしまうと、「嫌なこと」を経験する学びがなくなる可能性がある。幼稚園でのムシ捕り遊びでは、複雑なルールや明確なルールを設定せず遊ぶことが、人間関係の学びにおいては必要であるといえる。

今後の課題は以下の通りである。年長児と年中児のかかわりが12事例中7事例あり、他の活動に比べ、異年齢同士のかかわりが多いように感じた。今後、他の活動とムシ捕りを比較することにより、ムシ捕りと異年齢とのかかわりも明らかにしていきたい。本研究では、人間関係の学びのみ注目したため、記載しなかったが、観察期間中に幼児が捕まえたムシを、保育室の図鑑で知らべたり、飼育方法を保育者に尋ねたりする姿が見られた。幼児が、ムシとかかわることによる人間関係の学びのみではなく、人間関係以外の学びも明らかにしていきたい。これらのことを明らかにできれば、今後さらに幼児のムシ捕り活動の意義を示すことができるはずである。

引用文献

- (1) 山下久美・首藤敏元 2005 「幼稚園・保育園の動物飼育状況と飼育体験効果に関する研究展望—子どもとムシの関わりに関する研究に注目して」『埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要』pp. 177-188
- (2) 山下久美・首藤敏元 2008 「虫との関わりが幼児の社会性の発達に与える効果について」『埼玉大学紀要教育学部』57、pp. 105-121
- (3) 佐々木宏子 2004 『なめらかな幼小の連携教育—その実践とモデルカリキュラム』チャイルド社 pp. 134-136
- (4) 磯部裕子・山内紀幸 2007 『幼児教育知の探究1 ナラティブとしての保育学』萌文書林 pp. 223-235
- (5) 小泉栄美・野中弘敏・中野隆司 2011 「縦割り保育で子どもたちが経験していること—異年齢間の関わりのエピソードをもとに—」『山梨学院大学紀要』第33巻、pp. 49-61
- (6) 長谷川哲雄 2017 『かがくのとも ハナムグリ』福音館書店

(受理日 2017年8月23日)